

日本文化と禅

人間禅の書(二)

釈宗活老師の書

藤井 紹滴

今号は、両忘庵釈宗活老師の文殊菩薩の画・賛を取り上げます。

両忘庵老師は、明治3年東京のお生まれ、十代前半で両親に死に別れ、20歳で円覚寺の今北洪川禅師に入門。禅師帰寂後、法嗣釈宗演禅師に参禅。29歳大事了畢。31歳より、中断していた両忘会を再興。寺に住せず、居士禅をこようおおはざま挙揚。耕雲庵立田英山老師、一夢庵大峽竹堂老師は、その法嗣である。

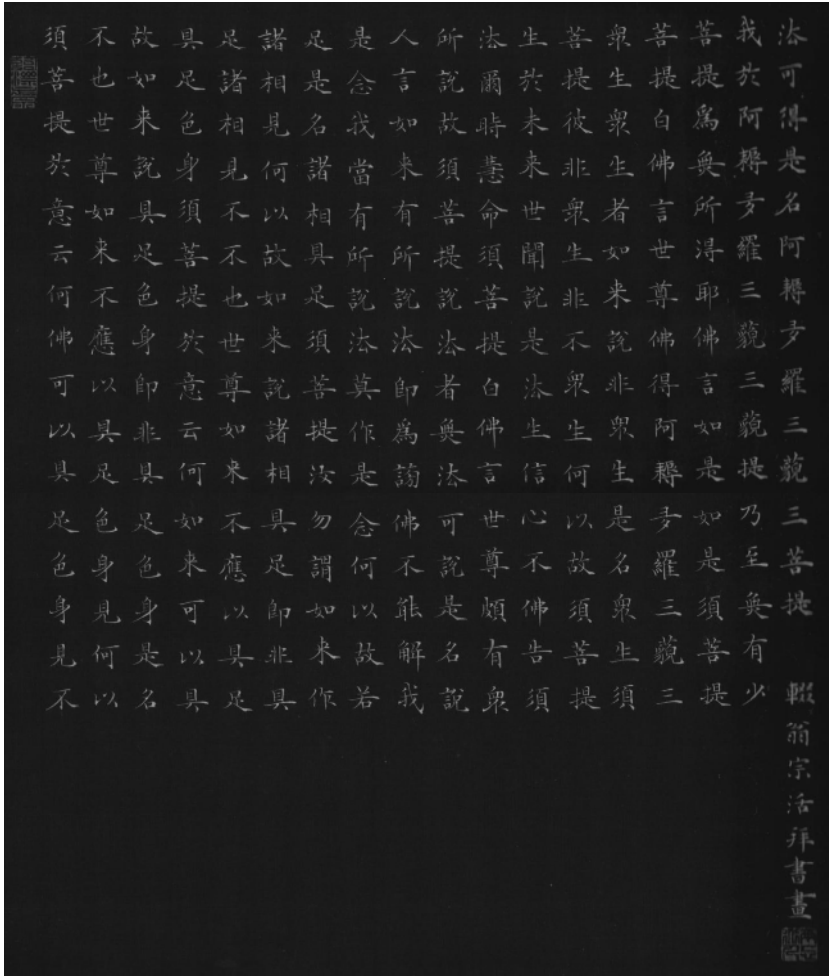
この文殊菩薩之幅の箱書に、自筆で「大正十年九月」とあるから51歳頃のお作。包み紙に「大峽蔵」(竹堂老師の書で)長屋讓受(長屋先生の書で)とあるので、始めは一夢庵老師、後に長屋哲翁先生の収蔵を経て、谷中のたくぼく擇木道場の所蔵となっている。この幅は紺の絹本に金泥で書かれており、90年を経ても精彩がある。

賛は『金剛般若経』(『金剛経』ともいう。)18行16字詰めで落款識とも293字。閑防印は「臨濟正宗」、落款印は「両忘道人」「宗活之印」と押されている。全体を見てみると、この293字であたかも一字をなしているようだ。枅野ますけいもなく、いきなり書いておられるが、粹に入

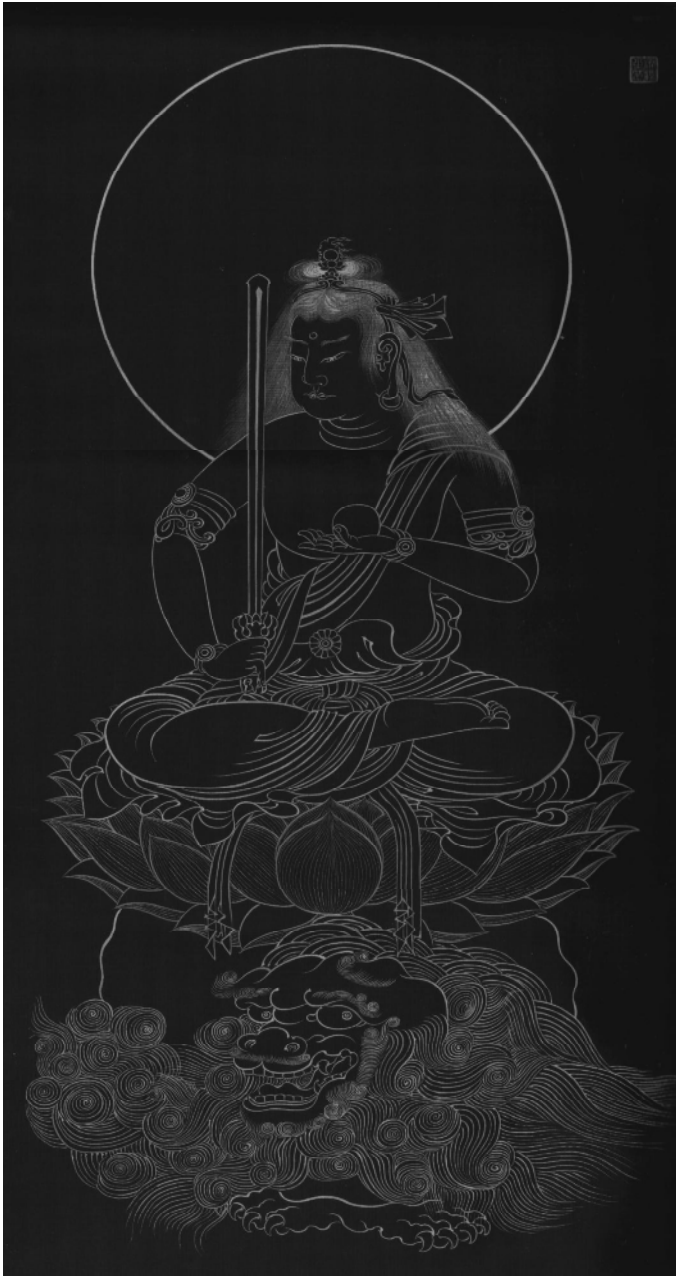


釈宗活老師の文殊菩薩之幅

っているようだ。しかしよく見ると、かなり波打って書かれていて老師の微妙な息づかいを感ずる。細かく見ると一線一線柔らかく、のびのびして実に精妙である。どの字をとっても、起筆、中間線、終筆ともゆるが忽せにせず、一点一画もおろそ疎かにされていない。さりとして少しも構えたところもなく、無理なく、素直に自分の気持を表しておられる。何にでも応じてゆける、ゆとりある自然な筆使いである。だから始め



『金剛般若経』画賛部分の拡大図



『文殊菩薩』画の拡大図

から終りまで何ひとつ破綻^{たん}はない。絹本に金泥での書は、筆先のさばきがうまくゆかず、なかなか毛先は動かないが何の逆らいもなく、書三昧となり、どこも全くごまかしが無い。老師の澄んだ平常心の奥深さは、見れば見るほど驚嘆させられる。

画の文殊菩薩は、構図がしっかりしていて、しかも強く揺るぎない。線の厳しさは、画工ではとてもまねができまい。菩薩の髪の毛の細く柔らかな線、光背のゆがみのない正円、金剛王宝剣の鋭い直線、身全体のふっくらした線、台座の蓮の葉の繊細な葉脈^{かのう}の線、狩野永徳の『唐獅子図』を彷彿^{ほうふつ}させる、獅子のたてがみの渦のとりまわしのたくましく変化に富んだ線、どれを取っても変化工夫の跡が見られ、こちらは画三昧で驚嘆させられる。

書といい、画といい、基本的用筆の十分な鍛錬がなされていて、我流に陥らず、現代人では及ぶべくもない。これらを見ていると、明治時代とは実に日本文化の一つの頂点であることが痛感させられる。このお作は必ずや国宝に指定されるだろう。擇木道場で大切に保管されねばならぬ。

画賛の『金剛経』は、世尊^{すぼだい}と須菩提との問答で、三段からなる。

「佛^{ほとけ}は色身を具足するを以って見るべきやいなや」(左から1行目)

「如来は諸相を具足するを以って見るべきやいなや」(左から4、5行目)

「汝は如来は是^この念をなし、我、當^{まさ}に法を説く所あるべきを謂^いふことなかれ、是の念をなすことなかれ」(左から7、8行目)

最後に、右から2、3行目に「須菩提よ、我、阿耨多羅三藐三菩提^{あのかたらさんみやくさんぼだい}において乃至^{ないし}少しの法の得べきもの有ることなし。」と結んでいる。

(つづく)



両忘庵 釈宗活老師 (1870 - 1954)

著者プロフィール



藤井紹 滴 (本名 / 頼次)
しょうてき

昭和15年、東京都生れ。会社経営。昭和37年、金子清超先生に入門。儒学、書、漢詩を学ぶ。(財)無窮会理事。儒学研究。昭和46年以来、擇 木道場にて長屋哲翁先生より禅の指導を受く。昭和61年、人間禅白田劫石老師に入門。